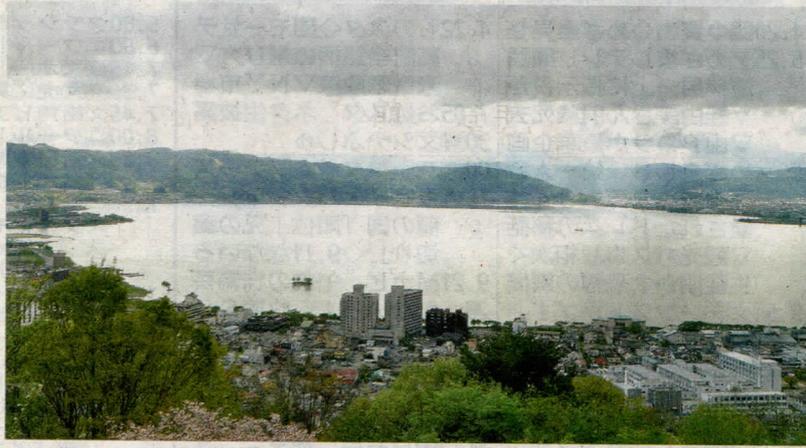


県環境保全研究所と信大の共同研究で気候変動が水位に影響を及ぼした可能性が示唆された諏訪湖



数百〜数千年ごとに増減

諏訪湖の水位 気候変動影響か

県環境保全研と
信大が共同研究

県環境保全研究所は30日、信州大学との共同研究により、諏訪湖の水位が数百〜数千年ごとに上昇と低下を繰り返していたことが分かったと発表した。世界的な寒冷期だった約1万2000年前と8000〜7000年前の2度にわたり大きな水位低下が生じてことも判明。世界規模の気候変動が諏訪湖の水位にも影響を及ぼした可能性が示唆される。

研究グループは、2020年と21年に諏訪市の諏訪湖畔でボーリング調査を実施。最終氷期末の約1万6000年前からの堆積物を調査し、諏訪湖の水位変動を変遷を追った。最終氷期から現代までには、数百〜数千年の短い周期で気温の変動が生じていたとされている。

今回の調査では、約1万6000〜6000年前の間に数百〜数千年単位で細かい粒からなる泥や根つこの化石などの有機物が含まれる泥などからなる古土壌の形成を両地点で確認し、両地点ともに同時期に陸上に露出していた時期があったことが分かった。特に、約1万2000年前、約8000年前、約7900年前、約7000年前の四つの時期では、諏訪湖の水位が低下していることも判明した。

水位が低下した時期と世界的に寒冷だった時期とおおむね一致していることから同グループは、「東アジアにおいて夏季の季節風が弱まった乾燥期に、諏訪湖周辺においても降水量が減少して湖への流入量が減り、湖の水位が低下したと考えられる」としている。

諏訪湖の水位は乾燥期以外でも低下しているが、断層活動や土砂の流入などの要因が考えられる。論文では断層活動による諏訪湖から天竜川への排出量の増減作用による水位の変化も指摘している。

研究成果は4月12日付で学術誌「Geomorphology」にオンライン掲載された。

(林駿汰)